

ホトトギス

二月号

ホトトギス 昭和二十四年三月二十八日通郵特刊 特別授受承認証第六二七号
平成二十七年二月一日発行 (第四百十八卷第二号)



俳句随想 〔三百九十二〕

汀子

自分のことを言うのは情けないが、歳を取るとうつかりすることがある。例えば正しく書いた積もりが、ふっと間違つて書いて、気がつかないことがある。最近ある大会で、投句ぎりぎりまで推敲して、短冊に書き入れた一句に、自分で気がつかないまま書いて仕舞ったことがあった。清記が回つて来た時に、「あれっ？」と思つてこれは清記が間違つていたので、締切ぎりぎりまで推敲を重ねて投句をしたのであるが間違つていた。「約束の如く秋晴たまはりし」と書いた積もりが「約束の如く快晴たまはりし」と書いてあつた。同じ時に「快晴となりゆく爽やかな空気」という句も出した。

年を取つた所為にしたくはないが、その後に私は出句した句を目の前に並べてじっくり確かめてから投句をし選句をすることにしてゐる。「天地有情」のご投句にも間違ひが多い。「夕飼」を「夕飼」、「秋刀魚」を「初刀魚」、「眩しい」を「眺しい」とある。

脳の働きはよく分からないが、ふと間違ひかも知れないと思つたときに辞書を引いてみるのが大事だとしきりに思つてゐる。当然と思つて書く漢字であつても、必ず辞書を引いて見ることにしている。

これからますます「うつかり」が出てくるかも知れない。自分に厳しくして、命の限り一人の俳人として全うして行かなければならないとつくづく思つてゐる。俳人の皆様のご研鑽を祈りつつ筆を置く。

句日記 汀子

平成二十六年一月二日 芦屋ホトギス会

厳寒というて油断を窺むる
寒菊の咲き永らふる香の中に
富士見えしより待春の心かな

二月二日 下萌句会

春時雨ともなく濡れて石畳
咲いてゐるとは一三輪濃紅梅
庭に出てみれば春めきをりしこと
明るさも春めくもの一つかな

二月三日 ロイヤル俳壇

遠くより見つつ来し川猫柳
余寒脱ぎ捨てしホテルのロビーかな
軽装になれざること余寒かな
ひそひそと老後の話聞く余寒

二月七日 アネモネ会 おぼろ月会

上梓祝ぐ心集へば春めきぬ
春宵の心寄せ合ふ仲間とも
夜の玻璃に映る花束春めける

二月十三日 祝「百鳥」二十周年

百鳥の声の揃ひて囀れる
春の雪積る心のありそめし
祝ぎ心集ふ明るさ春の宵
二月十三日 清交社
み吉野の鶯を聞く日も近し

うなだるる姿とも片栗の花
雪解の早さに大地息づける
目覚めゆく大地いとしと雪解川
雪解をうながす力ある日和
春めくはまだ少し先旅支度
二月十四日 工業倶楽部

二月十四日 有恒俳句会

春時雨すぐ止むてふ心あり
明るさを拡げ行くとき路の臺
春時雨零す雲より動き初む
春寒をかこつ言葉は口にせず
格勤のバレタインの日なりけり
水音に包まれてゆく猫柳
太陽の豊かな川辺猫柳
春寒を旅に置き来し家路かな
春浅し残りし仕事なほ二三

二月十八日 無名会

春の風邪引いてはならぬ旅予定
庭の色はじまつてぬし梅二三
この梅に庭の春秋始まりぬ
魁けを白梅の追ふ濃紅梅
春の風邪マイク回つて来たりけり
目許よりはじまつてぬし春の風邪
二月十九日 夏潮句会
白梅に立ち紅梅に歩き出す
紅梅に魁と紅梅に歩みあり
手摺つけ春めく心ととのふる
早準備吉野の花の案内状
今の世になかりし絵踏語り継ぐ
我ならば絵踏の世生くすべなきと
水音に風音重ね春浅し

紅梅を素通りしたる人もをり
二月二十日 祝「桑海」五百号

祝ぎ心もて牡丹の彩れる
二月二十一日 悼大橋敦子嬢

暖かき地へ旅立ちて行かれしか
二月二十三日 芦屋俳句会

光満ちぬても外に出て春浅し
心には季節先どり春浅し

人集ふ所は春の浅くとも
二月二十五日 大阪倶楽部

踏んでぬしこと気づかず犬ふぐり
早春の野を渡り来し計報かな
早春の雪二つ済みたる安堵
これ以上芝焼くことは許されず

足許を少し焦がして芝火消ゆ
二月二十五日 綿葉倶楽部

春の風邪引いてはならぬ会二つ
春といふだけで安心出来ぬこと
早春や話せば解ることばかり
渋滞のどこまで伸びてゆく雪解

二月二十七日 きさらぎ会

雨雲の中の上京実朝忌
春雨の止みさうに止みさうに降る
庭に出て梅見の心ととのひし
梅を見る心先立てをりしかな
上京は久しぶりなる実朝忌

二月二十八日 時雨句会

青空の増えてゆくときいぬふぐり
欠席は一人ならざる春の風邪
欠席の言伝春の風邪なりし
引鶴となりし消息ありそめし

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年二月一日 芦屋ホトギス会

蒼々と富士厳寒の車窓かな
句碑の緑碧梧桐忌を身近にす
待春の音に豚カッ揚がりたる

二月二日 野分会芦屋例会

麦を踏む地球の裏を響かせて
後ろ手を崩さず麦を踏んでをり
俳諧の巴はあなた義仲忌
麦踏や大地の鼓動確かめて

二月四日 むさし野吟行会

熊笹のぶると震へて春寒し
春立ちぬ都心のど真ん中の森

二月六日 蕉心会

冴返る別人といふ作曲家
ラーメンを食べたら治る春の風邪
春水を揺らし釣竿揺らす水尾
蝌蚪の紐産みつばなしで親はどこ

白梅の香を放ちたる陽気かな
白梅のほほゑんでゐる日向かな
大会の参加者増えて山笑ふ
句座和む二月礼者の笑顔かな

二月八日 カトリック新聞選者吟

寒の星主の公現に輝ける

二月十日 朝日カルチャー若草句会

春寒ややつぱりあの人が都知事
針供養父子二代の店を閉づ
人類に衣類欠かせず針供養
春寒き朝真つ新たな通勤路

二月十三日 土筆会

恋猫となりて星空独り占め
梅が香に芝公園の時止まる
猫の恋とは唐突に繊細に

二月十四日 北國文芸選者吟

恋多き人恋猫を膝に乗せ
何時の世も巴は元氣義仲忌

二月十六日 野分会東京例会

麦踏んで地の咳きを聞いてをり
風に詩を紡ぎつつ麦踏んでをり
俳聖も御前も来ませ義仲忌

二月十八日 「俳句四季」出句

麦を踏む水平線を近づけて
麦を踏む蝦夷の大地を響かせて
風に歩を止めることなく麦を踏む

二月二十日 登高会

凍解を促す風は浄土より
凍解はこの白銀の消えてより
いぬふぐり空より貫ふ詩心
春一番東京タワー突き抜けて

二月二十二日 虚子記念文学館投句

虚子館の未来語る目凍ゆるむ
二月二十三日 虚子生誕俳句祭小句会

記念樹の走り根浅き春纏ひ
俳磚の文字青々と春浅し

二月二十五日 若水句会

末黒野に早や神宿る一とところ
ポルドーと松阪牛と京菊菜
午祭朱に染まりたる詩心
見下して見上げて焼野焼野かな

二月二十六日 目黒学園句会

同人の司祭絵踏の世を語る
白銀に都心仕上げて冴返る
路の臺少し地球を膨らませ
顔の無き踏絵の叫びありにけり

雑詠 廣太郎 選

厨より書斎に移る夜長の灯	直方	林加寸美
まだ吾に為すこと多き夜長かな	同	同
ペン置けばことりと音の秋深む	同	同
蛸の遠音うつろふ季の心	東京	田治 紫
露の身と知るも明るき夢を追ひ	同	同
聖母像露の祈りを唱へけり	同	同
冷まじや突如噴火の神の山	長岡	安原 葉
比叡に向き修す一人の西虚子忌	同	同
峰寺は紅葉しそめし頃ならん	同	同
香水や言葉は人を欺かず	福山	竹下陶子
虚子選の朱筆うすれし秋灯	同	同
後を来し人にはつかず草虱	同	同
マイアミにEメール打ち今日の月	熱海	嶋田 一步
いつまでも富士の上とし今日の月	同	同
北海道大雨といふ今日の月	同	同
恋心宵を待てずに昼の虫	東京	橋本くに彦
その人と共に旅立つ草じらみ	同	同
右近く左に遠く鉦叩	同	同

露けさのあふれて川となりにけり	熊本	岩岡中正
露けさにみな旅人となりにけり	同	同
山水にたてばたちまち露けき身	同	同
あきつ飛ぶ国会庭園人まばら	東京	大久保白村
小鳥来る首相留守なる官邸に	同	同
歴代の首相見てきし竹の春	同	同
生姜市表通りは常ながら	龍ヶ崎	今橋眞理子
降りながら晴れながらだらく祭	同	同
昨日今日明日も句会や獺祭忌	同	同
水澄むや川面の剥がれては速む	香川	湯川 雅
吹き重ね風の枚数芭蕉林	同	同
人避けて風に免れて秋の人	同	同
杞陽師を語り伝へん震災忌	神戸	千原叡子
露けくも過ぎし歳月杞陽展	同	同
虚子館の杞陽展出て杜鵑草	同	同
すれ違ふ言葉整へゆく良夜	同	山田佳乃
遠く来て二十三夜の影法師	同	同
門司港の灯を宿す露の玉	同	同
露の文より余花朗の句を拾ふ	奈良	古賀しづれ
爽やかや杞陽の文字のつつましく	同	同
虚子素十杞陽余花朗偲ぶ秋	同	同
踊子に黒といふ色風の盆	神戸	藤井啓子
騎馬戦の総大将に秋高し	同	同
地に影の長く運動会終る	同	同

雑詠句評（二月号より）

美 奇・憲 明・眞理子
保 佳・中 正・むつみ
葉 ・とほ歩・静 龍
千鶴子・廣太郎

一丁目だけにありたる雹の害

相模原

木村享史

夏、主として雷雨にともなつて降る雹の大きなものを雹という
と歳時記にはある。筆者の住む東京は雹などは滅多に降らず、山
国での雹とか農作物の雹害などを聞くばかりであつた。

ところが、今年、東京三鷹市に集中豪雨が忽ち雹となり、余り
の激しさに屋根瓦やガラスが割れ草木が千切れて降り積もつた。
それはこの句のように同じ町内だけに集中し雹害をもたらしした。
山ほどの表現したいことを語らず「一丁目だけに」と場所を表し
た見事さ、まことに俳句は寡黙であるべき詩。（美奇）

地球温暖化も原因しているのかも知れないが、最近の「雹」の
被害は、以前には考えられなかつたようなピンポイントで起こる
のではないだろうか。それこそ隣家を挟んで被害があつたりな
かつたりする。特に雹の害は家や車の窓ガラスを破壊したりする事
もあり、平明な表現が却つて恐ろしく感じる。（廣太郎）

一瞬のためらひもなく星とべり

長 岡

安原 葉

「一瞬」は一またたきをすること。そこから出て、極めてわず
かな間。「ためらひもなく」という。一途に光の尾をひくばかり。
「星とべり」に今がある。その通りである。その通りに描いて
「流星」そのものの姿に迫っている。平明に、しかも深。「流れ
星が流れる間に、願いごとを唱えるとかなく」と聞いたとおりに
唱えようとするが、言つてしまわぬうちに消えたことに、ほろ苦
い想い出をもつ人もいよう。（憲明）

御存知の通り、流れ星というのは星そのものではなく、宇宙に
漂っている塵等が地球の大気圏に入ると、大気との摩擦熱で燃え
て見える現象である、なんて申し上げると身も蓋もないが、それ
でも見えると神秘的で、ロマンチックなものである。そしてその
スピード感が雄弁に語られている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

三瓶野に似たる松虫草の原	長岡	安原	葉
露けしや傾くまの八重の墓	同		
袋掛果実の里の色鎮め	東京	稲畑廣太郎	
その中の虚子は金春薪能	同		
水禍ありし由良川の辺の露葎	樺原	稲岡	長
雑草の宿舎の庭も花野めく	同		
子規忌ふと母御の心思ひやる	我孫子	副島いみ子	
結婚をせずに終りし子規忌ふと	同		
もの読んで静かな夫婦草の花	熊本	岩岡中正	
筆硯といふ露けさを愛しけり	同		
さと日照雨松虫草も句碑も濃く	東京	河野美奇	
月も星も松虫草を濡らす野ぞ	同		
生きてゐる汗を拭うて忌を修す	相模原	木村享史	
仮の世に未練まだある土用灸	同		
復刻も電子書籍や獺祭忌	東京	大久保白村	
子規忌の灯花鳥諷詠塾に満ち	同		
こぼれくる音ひとつぶの秋ならむ	同橋	本くに彦	
小流れの水澄む音となりにけり	同		

涼しいといふことをはき違へたる	神戸	後藤比奈夫
向日葵の黄がこれでもかこれでもか	同	
流灯の娘の靈明り潮に置く	福山	竹下陶子
手の念珠うかぶ流灯置きにけり	同	
一挿しと云ふ草の花心憎し	仙台	赤川誓城
石段が好きわらんべに蜻蛉に	同	
稲刈のすみし匂ひの夕べかな	龍ヶ崎	今橋眞理子
老成の遺影かかげて子規忌句座	同	
秋晴の片すみにゐて人悼む	東京	山田閨子
一陣の風をあまさず秋桜	同	
木犀の匂ふやつぱり誰かゐる	神戸	後藤立夫
残菊の蕾いちいち美しき	同	
喪の庭に咲き鎮もれる百日白	吹田	大橋 暁
赤のまま昔はここに幼稚園	同	
一ト夏を病みて過ごせしこと淋し	東京	今井千鶴子
秋深きその夜月なく星もなく	同	
秋の道ただまつぐにありにけり	群馬	中杉隆世
秋の道曲るところに來て曲る	同	

い子選

みちのくの旅

稲畑汀子

東日本大震災から三年半の歳月が経過した。公益社団法人日本伝統俳句協会の年一度の全国俳句大会を宮城県が担当をして下さる赤川誓城さんを中心に準備を進めて下さっていた。私はいつも東京に滞在する続きの様にスケジュールを立てて行く。ご一緒しましょうと言っていた稲岡先生は、病院のお勤めの関係で土曜日の朝、奈良の橿原から来られるので、東京から東北新幹線で合流することにした。同じ車両の近い座席を購入するために、芦屋のJRの駅で東京から仙台までの切符を二人分買うことで予定が纏まった。

「先生、無くさないで下さいよ」

我が家の夏潮句会に来られた稲岡先生に特急券をしつかりお渡しすることが出来てほっとした。色々調べていく内に帰りは仙台空港から伊丹空港に直行便があることが分った。

東京経由で伊丹へ帰る予定にしていたが、そうすると一日助かる。

「先生、飛行機なら日曜日に伊丹に帰れそうですが、新幹線よりも早く帰れそうなのでそれでいいですか。よければ一緒に取りま

すが」

「それは、嬉しいな。帰り、新幹線だと京都から近鉄がもう無くなるような時間になるかと心配していたのですが、それは有難いです。よろしくお願いいたします」

「伊丹八時半なら、近鉄の上六に悠々間に合いますね」

「もちろん。悠々です」

私は駐車場に車が駐めてあるので上六経由で帰ることにした。

伊丹空港のカウンターは毎週東京へ行く時に予約をとることにしてもう四十年近く経つ。何となく顔見知りになっている係の人達が親切に手続きをしてくれる。

「私は社長で秘書で小使いなよ。だから、全部自分でしなきゃならないのよ」

と係の人には言っている。実際はホトトギス社で切符を取ってもらう時がよくあるのに、口を拭っている。

すっかり旅の準備は調った。

今、私は東京駅の二十三番のプラットフォームで稲岡先生が合流されるのを待っていた。目の前には東京発十一時二十分発「はやぶさ十七号」が停まっていた。

「先生は遅れてらっしゃるのかしら？奈良の橿原は遠いなあ」

出発のベルが鳴りそうなので、私は車両に乗ることにした。

「切符は先生が持っていらっしゃるのだから、何とかされるだろう」

諦めて車両の入り口に向かった。

「え」

車両の入口に稲岡先生の白いパナマ帽が見えた。

「え？」

「あー間に合いました。東海道新幹線から東北新幹線へ乗り継ぐのが分かりにくくて。それに八木で一列車乗り遅れたものからです」

「まー、へー」

座席に腰をおろすと既に乗り込んだ乗客で殆ど席は埋まっていた。

連休の初日の列車は満席で東京駅を滑り出した。

この列車に乗れば、仙台駅一時出発のバスに間に合う。

「あーあ」

稲岡先生が間に合うか心配した私の胸の高鳴りは、暫くおさまらなかった。

